

吉川広家と石見小笠原家

岩国初代藩主吉川広家は、吉川元春の3男として生まれ、元長が亡くなった後吉川家の当主になりました。当主として父元春、元長から受け継いだ「毛利両川」として山陰の軍事を統括し、関ヶ原の戦いでは主家である毛利家のために奔走した広家ですが、また部屋住みという立場だったころ、他家から養子に望まれていた時期がありました。今回は広家と石見の国人領主小笠原家との養子問題についてご紹介します。

石見小笠原家は現在の島根県川本町を本拠地としていました。川本町は左の地図を見てわかる通り、石見銀山の目と鼻の先にあります。12代当主長隆の時代には一時石見銀山を占拠するほどの力を持った一族でした。吉川家とも縁があり、吉川元経の娘がこの長隆の孫にあたる長雄(ながたか)に嫁いでいます。

島根県地図

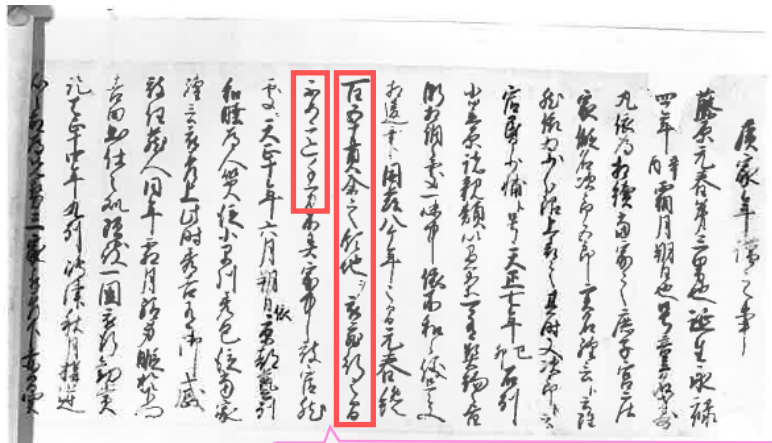


小笠原家はその後尼子氏に従って毛利家と戦うことになりましたが、長隆の時に降伏し、本拠地である川本は吉川元春の管理するところとなりました。

天正七(1579)年、小笠原家家臣より元春へ4男である松壽丸を養子にもらいたいという申し入れがありました。長雄の跡を継いでいた長旌(ながはた)が病弱であったためと言われています。しかし、松壽丸が早世してしまうと、3男である広家(当時は経言)に養子の白羽の矢が立ちました。父である元春と、経言自身はこの養子の件を意欲的に進めようとしたが、毛利家当主である輝元の大反対を受けて、実現する事はありませんでした。

輝元は元春に反対を告げた書状の中で元経が残した三子教訓状を持ち出し、この養子の問題が三家(毛利家、吉川家、小早川家)の滅亡につながるまで言っています。そこまで強硬に反対する理由の一つに、小笠原家が養子縁組により銀山近くの本拠地を取り戻すことで、銀山の経営に影響を及ぼしかねないという懸念がありました。また、一人領主である小笠原家と「両川」である吉川家双方が養子縁組によって力を増すことで、諸国衆との力関係のバランスが崩れることも危惧していたと思われる。この養子縁組の件は話を持ち込んだ小笠原家家老、小笠原長治の切腹によって幕を閉じた。天正十一(1583)年に記された元長の起請文(吉川家文書1247)にも、養子縁組の件は吉川家からではなく小笠原家から持ち込まれたものと小

早川隆景、毛利家家臣に釈明しています。



百五十貫余之領地ヲ被宛行之間 不如意千万

右の書状は広家(経言)の残した年譜(吉川家文書982)です。養子の話が立ち消えた後、「(元春から)一五〇貫のみの領地しかあたえられず、大変不服であった」と当時の不満を残しています。経言は他家へ入ることと領地を獲得し、一族当主としての活躍の場を望んでいたことがわかります。

広家(経言)はその後病死した元長の跡を継ぎ吉川家当主となりましたが、もしそのまま小笠原家の養子となっていたら歴史もまた違ったものになっていたかもしれません。

ん。

(参考文献)

- ・「中世川本・石見小笠原氏関係史料集」 編集 川本町教育委員会
- ・「シリーズ 織豊時代の研究4 吉川広家」 編著 光成津治 (小笠原 美里)

編集後記

▽今回の展示会は、吉川広家をメインに展示構成しました。つきまして、広家が家督前に父元春からの長い手紙を送られており、そのなかで一番長い手紙を展示しています。その長さメートル。これを記した元春の粘り強さは、ただ、すごいというほかありません。(原田史子)

▽今回は私と同じ苗字である小笠原氏について取り上げました。山陰の軍事を担当することは様々な武将たちと関りをもつことでもあります。本展示で広家がどのように考え毛利家を支えてきたのか、じっくりご覧になっていただきたいと思えます。(小笠原美里)

公益財団法人吉川報効会

吉川史料館

- 〒七四一-〇〇八一
- 山口県岩国市横山2丁目七-三
- 〇八二七-四一-一〇一〇
- 〇八二七-四一-三二〇〇